

[特別支援教育]

知的障害特別支援学校高等部における 相互評価による清掃スキルの形成

小川 彩*

1 問題の所在と目的

平成31年改訂特別支援学校高等部学習指導要領においては、知・徳・体にわたる「生きる力」を生徒に育むために「何のために学ぶのか」という各教科・科目等又は各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書などの教材の改善を促すため、全ての教科・科目等又は各教科等の目標及び内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成を目指す資質・能力の三つの柱で再整理した。さらに、平成31年2月文部科学省通知の特例告示では、「6 自立と社会参加に向けた教育の充実」の中に、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につけていくことができるよう、家庭や地域、関係機関等との連携を図りながら、キャリア教育の充実を図ることを規定した。このことから、特別支援学校高等部においては、生徒と学ぶ意義を共有しながら、社会的・職業的自立に向けて学習を展開していくことが求められている。

障害者の雇用においては、障害者の雇用の促進に関する法律（昭和35年制定）以降、2018年には大きな転換を迎えた。それは、法定雇用率の算定基礎に、精神障害者を加える改正法が施行されたことである。障害者雇用に関する状況を見ると、新規求職申込数、就職件数ともに大きく伸びており、今後とも障害特性に応じたきめ細かな就労支援を行うことが求められている。厚生労働省令和3年度調査によると、法定雇用率を達成している民間企業は全体の47.0%、また、企業規模別では1,000人以上規模の企業で法定雇用率を達成している企業の割合が55.9%。雇用障害者数59万7786.0人、実雇用率2.20%ともに過去最高を更新した。障害者活躍推進プランが提言された背景からも「働く力」を身につけていくことが特別支援学校高等部に求められている（文部科学省2019）。「働く力」は、個人が社会での生活や仕事を遂行するために必要なさまざまな能力やスキルを指している（文部科学省2017）。これらのことから、生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことが特別支援学校高等部の使命である。

本研究の対象は、一般就労を目指す生徒の進路実現を図るために職業教育に関する学習や実習を主とする高等部普通科の職業学級に在籍する生徒である。卒業後は障害者雇用での企業就労を目標に掲げている。本研究は高等部2年生を対象とした。机上の学習はこなせる生徒が多いものの、他者と協力して答えを見出すことを苦手としている実態がある。職場実習に向けた自己の捉えを見ても、自身の言動や行動を客観的に評価できる生徒は少ない。働くにあたっては、他者と協働し、その上での他者からのアドバイスや他者評価を受け入れること、また、客観的に自己の行動や言動を振り返り、次の行動に生かすことなどが求められる。それは他者に向けた評価も、自己の評価も一定の基準で測れるような力である。社会に出るために習得必須な力としてセルフマネジメントを重視した。

振り返りに焦点を当てた授業改善について、池田・諸橋・藤井（2022）は、振り返りに焦点を当てた授業改善を行ったことで「授業のめあてと振り返りの総合性が図られ、見通しの明確な学習活動が展開されるようになった」「動画活用と相互評価、学んだことをまとめ確認する取組、次時の目標との関連付けなど児童生徒による振り返りの充実が図られた」と述べている。

教育評価における相互評価とは、「学級集団などにおいて、生徒同士お互いに級友を評価させる方法」（東・梅本・芝・梶田1988）をいう。学習者間の相互評価に関して、藤原・大西・加藤（2007）は、「相互評価は、自己評価と比較すると、客観的に評価することができ、複数の学習者を評価したり、他の学習者が行った評価を見たりすることで、他者を評価することを学ぶことができる」「また、他の学習者を評価することは、自らを見直す機会となり、評価するこ

*新潟県立江南高等特別支援学校

と自体が自己へのフィードバックに繋がる」と述べている。

これらの先行研究を踏まえて、本研究においては、県で実施する特別支援学校清掃技能検定に向けた単元を設定し、動画活用や生徒同士の相互評価をもとに、学びを振り返ることで、生徒の行動を修正し、より正確な清掃スキルが獲得できるのではないかと考えた。

本研究では、特別支援学校清掃技能検定に向けた練習の中で、動画や生徒同士の相互評価の活用が検定マニュアルに即した清掃スキルを身につけるにあたり、有効な手立てになることを明らかにする。

2 研究の内容

本研究では、新潟県特別支援学校長会主催の職業技能検定の練習場面での行動を標的とした。

(1) 自身で修正を見出す活動

①自身の練習の様子を動画で振り返ることで、客観的に観て測り、修正すべき行動を見出すことができる。

②職業技能検定清掃部門、ア：ダスタークロス（以下、ダスター）、イ：モップ（以下、水モップ）の評価表の中から、動画で確認のできる5項目と、加えて、研究場面のすべてにおいて対象とした準備や姿勢・態度などの項目を標的行動にし、合計12の場면을対象とした（表1）。

表1 種目ごとの標的行動の項目と詳細

項目	種目	
	【ダスター】	【水モップ】
1	まっすぐ立つ、聞く姿勢	まっすぐ立つ、聞く姿勢
2	作業面 背筋を伸ばす	作業面※おさえ拭き房が付かない
3	※ヘッドをぶつけない	横木が浮かない
4	机にぶつけない	拭き残しなし、重ね拭き
5	※4分の1重ね拭き	※房糸を返す
6	すべてのごみ回収	手際のよさ
7	速度決められた時間で【8分】	速度決められた時間で【8分】
8	態度面 準備片付けまでできる	態度面 準備片付けまでできる
9	自分から報告できる	自分から報告できる
10	積極的で努力している	積極的で努力している
11	最後まで集中できる	最後まで集中できる
12	使う物の整理・管理ができる	使う物の整理・管理ができる

③②の12項目以外に、次回の課題を自由記述で書く欄を設けた。

(2) 友人へアドバイスを伝え合う活動

自己評価に、他者評価を活かすことができるか。他者評価を受け入れることができるか。

(3) 他者からの評価を受けて修正する活動

他者評価（友人や職員）を受けて、話し合いやチェックを行い、修正すべき点を理解できたか。客観視した自己評価との照合。評価表の自由記述（次回の課題）の記入。

3 研究計画

(1) 実践期間 令和5年6月～令和5年7月（全13回）

(2) 対象生徒 新潟県立知的障害特別支援学校 高等部普通科職業学級 2年生2学級19名（男子13名 女子6名）

(3) 実践上の手続き

①本研究開始前に書面にて保護者に研究参加の同意を得た。

②検証対象学年生徒のうち、職業技能検定の受検種目が「ダスター」と「水モップ」の生徒、そのうち職場実習などで授業を複数日受けられない生徒を除いて8名を抽出した。生徒A～Dがダスター受検生徒、生徒E～Hが水モップ受検生徒とした。

③授業はすべて同一時間帯に行い、授業者は著者を含む抽出した4名の職員で授業実践を行った。

④データ分析は、大学院で応用行動分析を学んだことのある授業者1名と著者の2名で検証した。

(4) 研究の手続き

本研究は、ベースライン期（約1週間）、介入期1（約1週間）、介入期2（約1週間）、フォローアップ期（検定当日を含む約1週間）から構成した。評価の項目は、生徒自身、友人、教員共に、3件法（よくできている：2、あやしい・できているとは言い切れない：1、できていない：0）で回答を求めた。

- ①ベースライン期：友人からの観察によるフィードバック、自己の振り返り、教員の行動観察
- ②介入期1：動画によるセルフモニタリングに関する手続きを説明した。動画の見方を説明し、評価の仕方を確認した。その後、生徒自身が、撮影したその日のうちに動画を評価し、評価表に記入した。友人からの観察によるフィードバックは継続した。
- ③介入期2：生徒自身の自己評価、友人からの観察によるフィードバックを行った。
- ④フォローアップ期：評価表なしで友人との相互評価のみで自己の振り返りを行った。

4 研究の検証

(1) 生徒の行動変容

図1, 2は、生徒B, Eの行動の推移を示している。標的行動を3段階で示した。まず、図1について述べる。図1は、ダスターを練習した生徒Bである。ベースライン期では、目視での観察による他者評価では「できている」としていているものの、動画や自己評価では「できていない」とされた。介入期1では、友人と動画を振り返り修正点をチェックすることで、自己評価も含めて概ね同じ評価ができていた。介入期2では、動画や自己評価が中心であったが、相違は少なく、できている回数が増えた。図2は、水モップの練習をした生徒Eである。ベースライン期では修正に苦労したものの、介入期1・2を経て安定して押さえ拭きをすることができていた。自分で正しく自己評価ができるようになった。

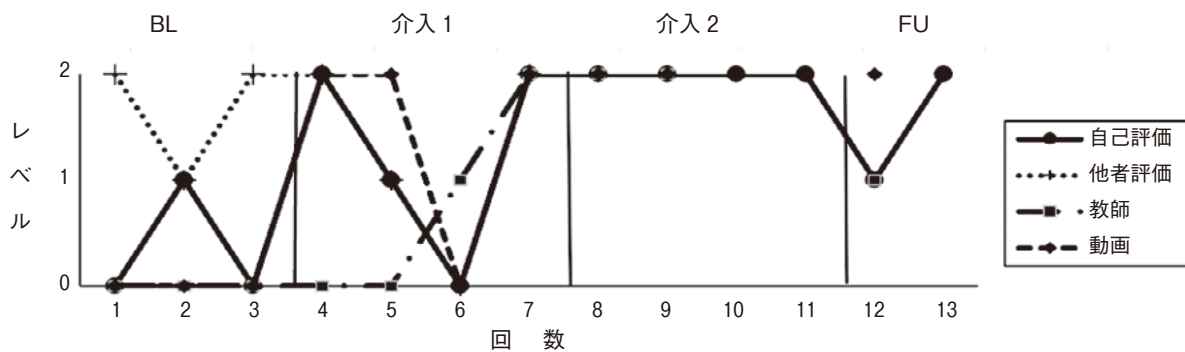


図1 ダスター生徒Bの「ヘッドをぶつけない」レベル

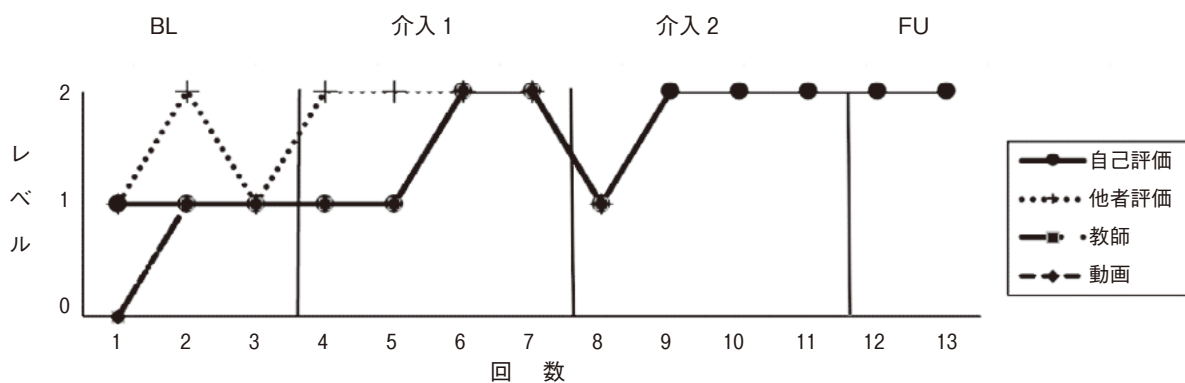


図2 水モップ生徒Eの「おさえ拭き 房が壁につかない」レベル

図3は検定の1回の流れにかかった速度を示している。どちらの種目も制限時間は8分(=480秒)であるが、回を重ねて一定の速度で取り組んだ。介入期2とフォローアップ期では、速度を測ることをねらいとしなかったが、生徒によっては速度を測って取り組みたいという生徒もいた。

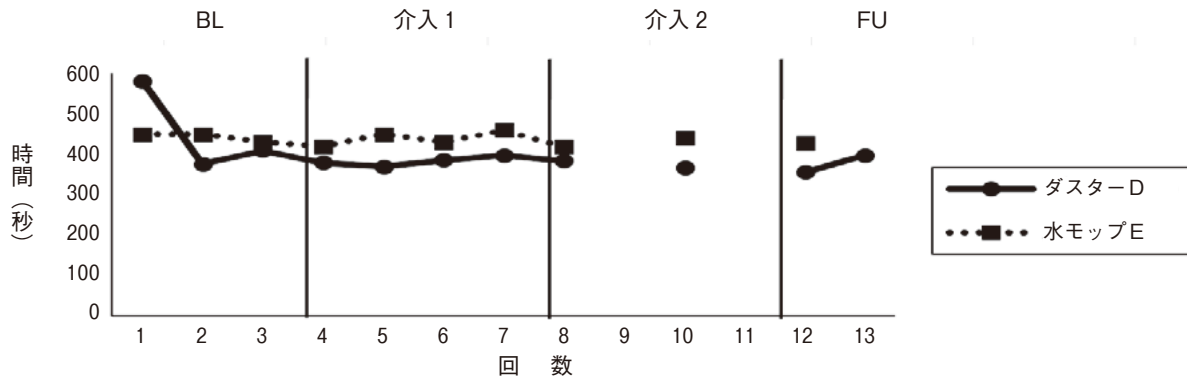


図3 生徒が要した時間

(2) 友人とのやりとりによる変容

表2のように、生徒自身の振り返りの中に、友人からのアドバイスや友人の変容について記入する様子も見られた。()内は、意味が通じるように追記した部分である。「受け入れて直したい」や、「できるようになりたい」とポジティブな振り返りがあったり、明確な「こうしたい」という気持ちが振り返りに表れていたりした。毎回同じような視点で書いた生徒もいたが、その日ごとに新たな視点で「次の課題」をもった生徒もいた。

表2 友人とのやりとりによる変容

種目	生徒	回数	記述
【ダスター】	A	9	動画を見て、ベアの○さんに教えてもらい、拭いていないところを踏んでいた ので、踏まないようにしたい。
		1, 3, 11, 12	背筋を伸ばす。動画を見ると猫背のことがあった。
	B	1~5	自分から動けるようにしたい、○さんのように積極的に努力したい。
		7, 12, 14	肘が壁から突き出ていることを教えてもらったので気をつける。 動画や、ベアの○さんのアドバイスで、戸惑っているように見えたので、直 したい。
	C	全	標的行動のできなかつた項目を羅列。
	D	2	「4分の1重ね拭き」で拭けていないことが○さんに注意されたので、次は頑 張りたい。
6		最初に焦ってしまい、ヘッドを浮かせてしまい、○さんにも動画を見てもらっ て確認した。	
【水モップ】	E	5	友達の練習を見て、(自分も)コートに入る前にもっと素早くできると思った。
		6	○さんのチェックで房糸を返す場面が間違っていたことが分かった。
		7	動画を見て、帽子のつばが壁ぎりぎりになっていたことが分かった。
		13	全体的に良くなってきているのでがんばりたい。
	F	全	標的行動のできなかつた項目を羅列。
	G	7	○さんのように、足と房の距離感を保ちたい。
		3	○さんに教えてもらったように(房の)着脱をスムーズにしたい。
	H	4	確認したように房をすばやく分けられるようにしたい。
6		動画で横拭きの時に姿勢が悪くなってしまったので胸を張りしたい。	
7		動画を見て間違えても顔に出さないようにしたい。	
		8~13	拭いたところを踏んでいた。→エリアは違うけどまだ踏む。直したい。

(3) 学習意欲の表れ

フォローアップ期の最終日である検定受検後に振り返りを行った。その記述内容から観点別にまとめたものを表3に示した。文中の（ ）内は、意味が通じるように追記した部分である。

表3 検定後の振り返り

観点	生徒	記述
修正できたこと	A	練習の時はいろいろ注意されてできないところがあった。
	B	初めての検定練習では4分の1重ね拭きが全然できなくて悔しい思いをした。S字ではまだワイパーみたいに（並行に拭かずに）拭いてしまうことがあった。悔しくて何度も練習したら上手にできた。
	C	最初のころは、間違っている箇所が多く、先輩や先生から注意されたことがたくさんあった。注意されたことを改善できるように何回も練習した。
	D	最初のころは手順もわからず、間違えてバックして拭いていた時があり、自分はこのままだと1級が取れないと思った。日々の練習を努力して行い、最終日では、185点取れて本番では1級が取れたのですごくうれしかった（改善すべきところを改善できた）。
	E	練習で自分ができなかった横拭きや抑え拭きで先生や先輩方からアドバイスを聞いて、横拭きは浮かなく（なった）、Z字は返す時に斜めではなく、まっすぐ返せ（るようになった）た、抑え拭きは上手く房がまとまらなくて時間がかかったが、（本番は）スムーズにまとめることができた。アドバイスを聞いてたくさん修正できたのでよかった。
	G	最初はなかなか難しくて直すのに時間がかかってしまっていたけど、練習していくうちに少しずつ直せるようになった。しかし、練習場所が変わったことでできなくなってしまったこともあった。それを直すために一生懸命練習して少しずつ直した。
	A	プレ検定の時もうまくいかないところもあったが、先輩から言われたことを意識してやれたのでよかった。
アドバイスを受けたこと	C	先輩から「視野を広くする」とアドバイスをもらい、そのように練習したら、取り残しのごみはなく、すべてを取りきることができた。本番でもよく床を見てごみを取りきることができた。
	D	ここまでこれたのは、自分の今まで練習してきたことが繋がったと思ったが、一番はK先輩がよいアドバイスをしてくれたことと、先生方が「ここを改善すればよくなる」と教えてくれたこともあり、1級がとれたのかと思った。
	H	私は水モップの練習の時に何度も音を立ててしまったり手順が忘れてしまっていることがあり、先輩や先生のアドバイスを聞いて直していったら、どんどんできるようになってきた。
	A	注意されたところや自分の苦手なところをたくさん練習したり、先生や先輩、友達の様子やアドバイスをもらい注意されたところや苦手なところを直せたのでよかった。
意欲の向上	B	後輩に上手に教えられるように頑張りたい。
	C	特に意識したのは挨拶の声と姿勢である。声と姿勢は態度に出るので、今後の学校生活の授業でも生かしていこうと思う。
	F	練習ではできていたことが、当日になり失敗してしまったので、悔しい。来年は失敗してしまったところを意識して直していきたい。
	G	1級はとれなかったが、水モップがどれくらい難しいかをよく知ることができた。水モップを選んでよかった。
	H	次は後輩に教える立場になるので、頑張りたい。

5 考察

生徒の行動変容と友人とのやりとりによる変容を中心に、成果と課題を考察する。自分で修正を見出すことは、記録を取ったすべての生徒が達成できた。修正できるまでにはそれぞれ時間は異なったが、課題点を明らかにして努力する姿が見られた。動画のチェックについては、自分が「できている」と思うと、動画の評価も「できている」と評価する生徒がいた。動画が有効な生徒が多かったが、介入期2からは、通しで動画を撮るというよりも、実際に友達に見てもらって修正箇所を何度も練習する生徒が多かった。修正箇所が減ってからは、再び通して動画を撮影したり、通し練習の中で修正箇所を確認したりする生徒もいた。このように生徒自身が自分で課題をもち、その課題を克服するためにオリジナルな練習メニューを構成したり、自らアドバイスを求めたことは上達したい意欲の表れと言える。

生徒の行動変容についての成果の一つは、自分で修正を見出せたことである。ベースライン期では、友人の見立てと自分の評価に開きのある生徒が多かった。評価の基準を複数人で繰り返し共有することで、一定の基準での他者評価や自己評価ができるようになった。介入期2では口頭での他者評価だけではなく、動画を友達に示して確認してもらったり、友達や先輩のやり方を見て学んだりする姿に発展した。友人が上達してくると、こつを探り、真似をして力を付けたいとする姿も見られた。自由記述に「いいながら動くとかっこわるい(生徒D)」「だらだらしているつもりはないけど(動画を見て)そのように見えた(生徒C)」とあった。他者評価を素直に受け入れ、自分事として置き換え、自己を向上させたい思いが芽生えた。

生徒によっては、ベースライン期から修正点がある程度絞られている生徒もいた。そのため、練習期間が長いと思える生徒もいたが、練習方法を工夫することで、集中を切らさずに練習を続けることができた。標的行動のI1を「最後まで集中できる」としたことで、自由記述で「集中力を付けたい(生徒B)」と感じた生徒や、「後半になるにつれて集中が切れてできていたことができなくなった(生徒G)」と感じた生徒がいた。先に述べたように、通し練習を繰り返すよりは、取り出しの練習をして自信を付けたいという生徒もおり、動画の活用よりもピンポイントに自分の苦手なところを繰り返す練習するなど、練習メニューを考えられる生徒もいた。このことから、指導方法の一つとしては有効であった。自分たちで練習方法を工夫して向上しようと継続して学習を続けることができた。「これをしてよいか?」「こっちの方が自分には必要だ」と練習メニューを自己選択できる場面もあった。また、自由記述に「準備を早くしてゆとりをもちたい(生徒D)」と、準備の大切さを挙げた生徒もいた。この準備は授業前の清掃道具・検定物品の準備であり、授業前にゆとりを持つことで、課題を整理し、有意義な練習ができると感じたようである。技術の向上だけでなく、働く上で大切なことに気が付いた生徒もいた。

課題として、生徒個々へのフィードバックの必要性が挙げられる。ベースラインから自己評価が高かった生徒は、一つ修正をしようとする速度が極端に1分程度延びてしまう傾向が見られた。また、清掃スキルを伸ばそうとするあまり、態度面の自己評価がずっと同じ生徒もいた。これらのことは、多くのことを課題とすることで優先順位が分からなくなったとも捉えられる。生徒自身が得手・不得手を理解したうえで、どこから修正していくべきかを明確にするような場面が必要であった。

また、職員の評価のみが異なるケースも少なくなかった。これは、技能検定の指導者講習会で確認した評価基準での見立てであり、生徒に同じ評価を求められていなかった結果である。検定の上位級を目指すだけでなく、清掃における「素早くきれいにしたい」「使う人が気持ちがいいようにしたい」と思えるような気持ちを育て、自身の課題を明らかにし、就労に生かせるような学習を展開していくことが、今後の課題である。

【引用文献】

- 東洋・梅本堯夫・芝祐順・梶田叡一「現代教育評価事典」, 金子書房, 1988年
- 池田和馬・諸岡美佳・藤井慶博「知的障害特別支援学校における『振り返り』に焦点を当てた授業改善-共通実践事項の設定とその実践状況の評価を通して-」, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第44号, 2022年, pp77~83
- 藤原康宏・大西仁・加藤浩「学習者間の相互評価に関する研究の動向と課題」, メディア教育研究第4号第1巻, 2007年, pp77~85
- 文部科学省「障害者活躍推進プラン」2019年, 「新しい学習指導要領の考え方」2017年